

共生するということ——隣人一家の引っ越しをきっかけに考えたこと

ギンジツク恭子

親しくお付き合いしてきた隣人一家が、違う町に引っ越しして行った。奥さんの話では、実はしばらく前から引っ越し先を探していたのだが、やっといいところが見つかったのだという。私より少し年上の彼女は、20代初めに結婚して家庭に入り、以来ずっと家事と育児に専念してきた人だ。子供と動物が大好きな気のいい人で、息子が小さい時には、ずいぶんお世話になった。彼女は息子をととても可愛がってくれて、息子もよく懐いていた。動物が大好きだった息子は、彼女の家の犬や猫と遊んだり、水槽のお魚を眺めるのを楽しみにしていたものだ。動物のことをいろいろ学ばせてもらったのは、ありがたかった。

さて、引っ越しの数年前から、住まいへの彼女のいろいろな不満は聞いていた。ここでは、彼女をハイジと呼んでおこう。ハイジさんが住んでいるのは、斜面に建てられた5階建てのアパート



ティチーノ州ロカルノからの眺め

メントで、彼女の住まいは、入り口玄関からは少し地下になっているが、裏庭から見ると、建物の2階になっている。下は各戸のガレージで、その上にある住まいのベランダはとても広い。動物と同じくお花も大好きなハイジさんは、そのベランダいっぱいには大小の植木鉢を並べて、丁寧に世話をしている。ただ、彼女によると、片側が半地下なので、冬は寒いのだという。子供が小さいうちは、下に住人がいないので、あまり気を使わなくてよかったかもしれないが、子供達がいなくなつてからの年配夫婦の二人住まいには、そのメリツトがデメリットに感じられるようになったのかもしれない。

だが、最後に背中を押したのは、洗濯室問題と隣人の騒音問題のようだ。専業主婦として生活をしてきたハイジさんは、家事のエキスパート。綺麗好きで、お掃除や洗濯やアイロンかけのやり方にも詳しい。家の中は、いつもこざっぱりしている。家事の中でも、彼女にとって洗濯とア

イロンかけは大事だった。長年の住人であるハイジさんは、管理人ではないが、そのアパートメントの住人のこともよく知っているし、洗濯室なども、みんなルールを守りながらお互いさまでやってきた。ところが、徐々に隣人たちが入れ替わって、暮らし方文化の違う人たちが入ってきてから、だんだんと暮らしにくくなってきた。

こちらの集合住宅には、共同洗濯室があつて、温度によって洗い分けられる大きくて本格的な洗濯機が置かれている。住人にはそれぞれ、1週間か2週間に一度洗濯日が割り振られ、その日にまとめて洗濯をする。たいてい隣に物干し部屋があつて、集合住宅のベランダに高々と洗濯物を翻すことはしない。夏などに小さな物を干す場合は、外から見えないように、丈の低い物干し台を使う。景観を考えての伝統だろう。さて、みんなで一緒に使うから、使用時間のことだったり、使った後の掃除のことだったり、時々トラブルも起きる。最近のモダンなアパートメントには、各戸にそれぞれ洗濯機が設置されている物件も増えているようだ。洗濯好きなハイジさんはだんだんと、自分の洗濯室を持てるアパートに移りたいと思うようになっていったらしい。

スイスは、ヨーロッパの真ん中にあつて、外国人の行き来の盛んな国だ。と同時に、スイスらしさを保ち続けてもいる。スイスらしさとは何かを語るのは、また別の機会に譲るが、概して真面目で規則を守る国民性というのはある。時間にもきちんとしている。例えば、スイスの鉄道は、ほぼ時刻表通りに発着する。日本人にすれば当たり前のことだが、それがどの国にも当てはまるといわけではない。それから、スイスには、集合住宅などで静粛を守らなければならない時間帯というものがある。それは、夜の10時から朝の7時までと、昼の12時から1時まで。少なくとも、私が知っているドイツ語圏の文化ではそうだ。

数年前に、彼女のアパートの気心知れた隣人が引っ越していった後、違う文化で育ったらしい若い夫婦が入居してきた。小さい子供が二人いる。子供がいるので洗濯物が多いのは仕方ないのだが、朝は7時前から、夜も時には夜中まで洗濯機を回している、とハイジさんには納得がいかない。洗濯室は、彼女の斜め上のスペースだから、ドアを開ければ少し音が聞こえてくるわけだし、昼の休憩時間に掃除機の音が聞こえることもある。また、子供たちも遅くまで賑やかだった。彼女が子育てしていた時代は、小さい子供はだいたい夜の8時までにはベッドにやられた。その習慣は、私も覚えていた。テレビ番組に「おやすみなさいのお話」というのがあったのだが、とても早い時間で驚いたものだ。こちらに来た頃は、テレビ放送が始まるのも午後からだったように思う。朝から深夜まで放送している日本から来た私は、それにも驚いた。息子が大きくなってからも、ハイジさんは時々お茶に呼んでくれて、思い出話に花を咲かせたものだ。とにかく、彼女はスイス社

会の暗黙の決まりごとを守りながら、きちんと子育てし、家庭を切り盛りしてきた人である。彼女にすれば、隣人にもその文化を尊重してほしい、つまり、気遣いがほしかったのだ。

いい意味で保守的だったスイスにも、新自由主義とグローバリズムの波が押し寄せてきて、もうずいぶんになる。それまでは、お店の営業時間も平日は18時半まで、土曜日は16時まで、そして、日曜日は完全に休みだった。お店で働く人にとっては規則的で、ある意味働きやすかったと思う。やがて、企業利益の更なる追求とライフスタイルの変化も鑑みて、規制が緩和されていった。私が来た頃、知人から聞いてなるほどと思った言葉がある。「スイスでは、変化は周回遅れでやってくるのよ」。しかし、急激な変化を好まない着実なお国柄のスイスにも、ここ二十数年の間に変化の波は否応なく押し寄せてきた。ソ連崩壊後の世界構図の変化は、スイスへの外国人流入にも拍車をかけた。イタリアやトルコからの人の流れは昔からあったが、やがて、バルカン半島から、タミールから、アフリカから、中東からと、様々な文化背景を持つ人たちが増えてきた。世界のあちこちで紛争や戦争が常にあつて、難民となる人たちが絶えない。

多様性の時代と言われるが、異文化の共生はそう容易いものではない。理屈では、多様性を受け入れなければならないとわかっている、実際に共に生活するとなると、そう簡単にいかないこともある。異文化が少数派のうちにはいいが、数が増えて声が大きくなれば、摩擦も起こってくるだろう。双方とも、自分の中に異文化を受け入れるには痛みも伴うのだ。客人であれば、いつかは帰っていく。だが、ずっとそこで暮らすとなれば話も違ってくる。私も、本当の意味でこちらの文化に慣れるまでには時間がかかった。インターネットなどの情報もない時代の話だから、日本とヨーロッパはお互いに遠い国だった。やはり、異文化に融合していくためには葛藤があるし、そのための努力も必要だ。「郷に入れば郷に従え」という諺ことわざがある。これは、新参者がその土地で暮らしていく上での礼儀ではないだろうか。そして、いい関係を築いていくための「始まりの知恵」と言ってもいい。礼儀をもってすれば、やがて受け入れ側も相手を知るようになり、本当の共生が始まっていく。文化のベールの下には、同じ人間同士の顔があると理解していくわけだ。

悲しいことに、今の世界には、自分の考えだけを強く信じ込む「狂信」が、再び大手を振るいだしている気がする。自分の立場しか考えない権力者が戦争を起こす。この世界には、多種多様な民族、また同じ国の中にも様々な人たちが暮らしていて、いろいろな考えがある。この地球で共に生き延びる道は、互いの「寛容の精神」しかないと思う。これまた、「言うは易く行は難し」という諺があるが、平たく言えば、互いの文化を尊重しながら、リスペクトを持って接していくということだろうか。